

十	平野町	謙信兜	明治二年九月
十一	米屋町	頼光兜	明治二年九月
十二	京町	玉取獅子	明治八年十月
十三	江川町	乾室丸	明治九年十月
十四	水主町	しゃち	明治九年十月 (再製昭和五年八月)

なほ本町の次に安政五年頃、細屋町に黒獅子が出来たが、明治二十年頃破棄されました。現在十四台の山笠があります。何れも木骨の上に紙を厚く貼り、その上に、金銀朱碧のうるしを介厚く塗つてあります。獅子頭が五台、兜が四台、魚留係三台、船二台、浦島一台となつており、その名々が裏に立派な芸術品で、昔の人の偉大さを感じさせます。現在の価格にすると一台一千万円位するそうです。(この唐津くんちは昔から各家々盛沢山な御馳走で、無礼講の振舞いですが、この習慣(俗に三月倒れといつて三ヶ月をこのくんちに費してしまふ)は、仲々矯正出来ず、現在でも続けられています。

織部燈籠

織部燈籠一名キリシタン燈籠と云われ、茶人に愛好される燈籠で、昔キリシタン禁座の時、信者が、十字架に模した燈籠の竿石にマリア像を觀音像の様に浮彫りに刻み、コツソリ様んだと云われる燈籠で、秀吉の臣古田織部と云う茶人がキリシタンであり、織部燈籠の名は古田織部に由来すると云われますが、全国でも稀れで、唐津では近松寺内に三基、他に一基あり、最近佐賀市内の寺に完全な燈籠が一基発見されました。

(其の他)

唐津の言葉

同じ佐賀縣でも、佐賀と唐津は、全然言葉が違います。佐賀の殿様は鍋島一色でしたが、唐津の城主は、寺沢の後は、徳川譜代の大名で、大久保は明石から、松平は佐倉から、土井は鳥羽から、水野は田崎から、小笠原は柳倉からと云うように方々から、殿様を迎えたので殿様に従つて来た土の言葉が入り交つたものと考えられ、最後の殿様だった小笠原公は關東の柳倉から移つて来たたのでしたから、現在でも唐津旧士族の言葉は「城内言葉」と云つて、東京辯と殆んど妻りません。町内の言葉で語尾に「ケ」を使いますが、これも関東なまりが入っています。

唐津の唄

唐津には北原白秋が作つた「唐津小唄」と「新曲松浦沼」が最も歌われ、又最近では、「観光唐津小唄」、「松浦音頭」が出来、何れも踊がありますが、唐津には古くから「唐津節」一名「茶碗や」と云う民謡があります。もつともこれは卑猥な点があるので一般に普及していません。然し他所から来た人に聞かされると、その節廻しを非常にほめられます。

これは昔、唐津焼の販入達が、土をこね下ら、又口ク口を廻しながら歌つたものと思われま